

第2期県立高等学校将来構想審議会
高校教育改革検証部会
(第2回)

平成23年1月26日(水曜日)
15:00~17:00

1 開 会

○進行 本日はお忙しい中、「第2回高校教育改革検証部会」に御出席を賜りましてありがとうございます。

はじめに、会議の成立について御報告申し上げます。本日は、小澤委員から急用により欠席する旨の御連絡をいただいております。したがって、7人中6人の部会委員が御出席ですので、県立高等学校将来構想審議会条例第6条第3項の規定により準用する第5条第2項の規定によりまして、本日の会議は成立しておりますことを御報告いたします。

それでは、ただいまから「第2回高校教育改革検証部会」を開会いたします。開催に当たりまして、宮城県教育委員会教育次長 高橋仁から御挨拶を申し上げます。

2 あいさつ

○高橋次長 皆さん、改めましてこんにちは。お忙しい中を、第2回の検証部会に御出席いただきまして、大変ありがとうございます。今日は議事が大きく3つということで、盛りだくさんになるかと思っております。いろいろな観点から忌憚のない御意見を頂戴して、より良い県立高校づくりに向けた取組を進めていきたいと考えておりますので、本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

○進行 以降の進行につきましては、柴山部会長にお願いいたします。それでは、よろしくお願いいたします。

3 議事（1）会議の公開について

○柴山部会長 それでは、議事を進めたいと思います。議事（1）の「会議の公開」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局 資料1の「情報公開条例抜粋」を御覧いただきたいと思っております。前回の部会において、本部会の会議は原則公開で開催することとし、個人情報などの非開示情報を取り扱うことになった場合には、その都度、会議の公開の有無を議決することを決議いたしました。

今回の部会における一部の議案では、学校別のデータをお示しし、これに基づいて議論いただくこととなります。これらのデータには、情報公開条例上、非開示情報に当たるものが含まれている可能性があり、事務局において非開示情報に該当するか否かを精査しましたところ、事務局におきましては次の2つの理由により、今回、資料として使用する学校別データは、非開示情報に当たるものと判断いたしました。

第1点目として、今回の資料には、新将来構想の多様な生徒の受入態勢等に係るデータとして、学校別に「特別な支援を要する生徒」の人数を掲示しております。この資料は個人の氏名を表示したものではありません。人数のみを記載したのですが、人数が極めて限定されていることから、一部の学校においては本情報から特定の個人が識別されてしまうおそれあり、県情報公開条例第8条第1項第2号に該当します。そのため、本資料に基づいて行われる審議、具体的には本日の議事（3）の部分につきましては、同条例第19条第1号の規定により、非公開で行うべきと考えております。

第2点目としまして、今回の資料には、学校別の学力テストの結果（平均点）が記載されております。県立学校の入学者選抜は、学校・学科の特色に応じ、その教育を受けるに足る多様な能力と適正等を積極的に評価することとされており、学力検査の結果だけでなく、調査書、その他の資料に基づき審査しておりますが、学力テストの平均点が学校別に公開された場合、学校間の序列化を不用意に招くとともに、特定の学校に志願者が集中するなど、入学者選抜の適正な執行に支障が生じるおそれがあると考えられます。よって、県情報公開条例第8条第1項第7号に該当し、本資料に基づく議題（3）の審議については、やはり非公開で行うべきと考えております。

なお、資料中、各学校の表記をA校、B校等と記号化して表示することも検討しましたが、県立校の数が限定されていることから、容易に学校を特定することが可能であり、非公開はやむを得ないものと考えております。以上、よろしく御審議賜りますようお願いいたします。

○柴山部会長 ただいま、事務局から、本日の議事のうち、「(3) 高校教育改革の現状把握について」は非公開で実施すべきとの提案がありました。理由についても説明がありましたが、これにつきまして御質問・御意見等はございますか。委員の先生方、かなりセンシティブなデータなども含まれているということですので、よろしいでしょうか。

（「はい」という声あり）

○柴山部会長 意見がないようですので、事務局の原案どおり決定することといたします。それでは、本日の議事のうち、「(2) 男女共学化に関するデータの収集・整理の方向性について」までは公開で審議を行い、「(3) 高校教育改革の現状把握について」は非公開で行うことといたします。

4 議事（2）男女共学化に関するデータの収集・整理の方向性について

○柴山部会長 続きまして、議事（2）です。「男女共学化に関するデータの収集・整理の方向性について」の議論に入りたいと思います。はじめに、事務局から説明をお願いします。

○事務局 「資料2」を御覧ください。標題に「男女共学化に関するデータの収集・整理の方向性について（案）」と記載されている資料でございます。前回の部会では、「平成22年度は『普通教育・専門教育の体制整備』を中心に検証作業を進めるが、その他のテーマ（男女共学化、全県一学区化）についても、必要なデータの収集・整理をしておくこととする」とされました。このうち、「全県一学区化」については、県立高等学校入学者選抜審議会のほうでフォローしていくとされておりますので、今回はもう一つの検証テーマである、「男女共学化」に関するデータの収集・整理の方向性について検討していただきたいということで、事務局で案を用意いたしました。

その具体的な方向性としては、3つが考えられると思っております。1つ目が、「統計的データの収集・整理」。ここに①から⑤まで記載してございます。学校基本調査、学力状況調査、学校評価、行政評価、その他、教育庁が業務上収集している統計的データ。これらの調査結果を

収集し、共学化校、従来からの共学校ごとに各種データの経年変化などを整理することを通して、客観的な視点からの課題や成果の同定にアプローチするというのが1つでございます。

2つ目は「現地調査」(学校訪問)です。実際に男女共学化をした学校に赴き、現場の教員及び生徒へのインタビューなどを通して、1で整理したデータを補足していくというものでございます。具体的なイメージとしての①「調査対象校」は、地域や生徒の適正能力などのバランスに配慮し、制度移行期における特有の問題等を浮き彫りにできるよう、ア)共学化進行中の学校、イ)共学化が完成した学校、ウ)従来からの共学校。こういった3つのタイプの学校を調査対象にしてはどうか。また、「調査項目」については、1の統計的データの収集・整理をし、それらの結果を踏まえた上で、実際の調査項目を決めていく、そういったことをイメージしております。

3つ目は「意識調査」です。男女共学化に伴う現場教員の意識変化や教育活動の変化などの把握に向け、意識調査を行うというものでございます。具体的イメージとしては、「調査対象校」は2①と同じ3つのパターンです。「調査方法」としては、無記名のアンケート方式。「調査項目」については、これも別に検討して決定していく、というものです。

以上でございます。こういった方向で収集・整理していけばいいか、御審議いただければと思っております。

○柴山部会長 ただいま、事務局から男女共学化に関するデータの収集・整理の方向性について、説明がありました。これについて、何か御質問・御意見はございますか。

○倉光委員 質問が1つあります。1④「行政評価」の対象は、データが出ていますか。

○事務局 行政評価については、予算事業が対象なので、施設整備という名目では掲載されていません。

○倉光委員 分かりました。

○羽田委員 私もおそらくこの手順が順当ではないかと思えます。この前も「意識調査」をどうするか結構、議論になりました。私たちが大学で教員調査とか院生調査とかをすると、調査設計に最低でも3カ月くらいの時間がかかる。かなり絞り込みをしないと、どうしてもボリュームが出てきて、忙しい先生に大変に迷惑をかける。

①と②で問題を絞り込んで、その仮説を説明するようなところを組み込むのが一番理想的。まず①と②で問題構造なり、調査で把握することをきちんと絞る。それを先決するほうが、結果的にいい結論が得られるのではないかと思います。データが過剰にあっても、整理とか理解に困るだけですので。とりあえず①と②をきちんとやって、教員に聞く。ポイントを絞っていくというのが、妥当ではないかと思えます。

○倉光委員 これは生徒と教員ということで、学校の中の意見になります。PTAとか保護者といった学校外部の意見は、今回は外してやっていこうということですか。そういう意見もあつ

たように思うんですけども。

○事務局 それについても御意見を頂戴できればと思います。

○倉光委員 時間が限られますし、ある程度絞ってやっていくことも必要かと思いますね。

○柴山部会長 この種のデータを集めるときには、データ収集のデザインがとても重要です。2番の「現地調査」のところに、「調査対象校」がございますね。そこにア) イ) ウ) となっています。共学化進行中、現在進行形の学校。共学化が完成した、もう終了した学校。それから、従来からの共学校。3つのファクターで押さえておけば、それぞれが比較可能になる。それぞれどういう問題が出てくるか。たとえば、共学化進行中の学校は環境が激変していますから、おそらく共学化に対して反発している生徒さんが多い。でも、終わったらそうでもなくなるとか。仮説ではありますけれども、そういうことが見えてくる。生徒さんたちや学校の先生方に負担をかけないという意味でも、そういうふうに絞り込んでいくやり方がいいのかなと。

○倉光委員 ア) イ) ウ) に該当する学校は、いま何校ぐらいあるんですか。

○事務局 現構想期間中に共学化の俎上に上がったのは、全部で17校ほどありまして、まだ途中なのが6校くらいです。

○羽田委員 「資料4」の3ページに「統合・共学化」とあります。このリストですね。

○柴山部会長 そういたしますと、ア) が6校、イ) が7校。残り4校がウ) ということでよろしいでしょうか。

○事務局 はい。

○柴山部会長 数的にもちょうどバランスがいいので、見えてくるものも多いと思います。

○齋藤委員 このような形で、経年変化を見ることができるデータは貴重だなと思います。

○羽田委員 私は大学の統合の研究もしたことがあるんです。結婚になぞらえて統合を説明することが結構あります。新婚期とか、うまくいかなくて離婚して、また元に戻ることもあるんです。ですから、プロセスのどの時点にいるかで、問題とか意識は非常に変わってくる。プロセス全体を眺めながらどうなるかという評価が、一番大事だと思う。そういう点では、ア) イ) ウ) のように並べるというのはすごく大事だと思います。

○柴山部会長 それから、先ほど倉光委員から御指摘のあったPTAに関して。佐々木委員、何か。

○佐々木委員 前にもお話ししたかと思いますが、こういうことを調べるには限界があると思うんです。男女共学校ではない、別学のところで学びたかった子が、私立に行っているのではないかと思われるんです。あるいは、通信制の学校とか。そういった子どもたちの意見を聞く機会はないだろうかというのは、ずっと気になっていたところです。ここから見えてくるものは、何となく想像がつくんです。校長先生はじめ生徒も、男女共学化を目指して、そこを受験して入ったわけですから、いろいろな課題があろうと全体的に前向きな意見が多いと思うんです。それ以外のところを調べなくてもいいのかなと思います。PTAというよりも、それが気掛かりです。この審議会で調べることなのかというのも、分からないですが。

○羽田委員 転校の数は分かりますよね。

○事務局 数的には少ないと思います。

○羽田委員 そういう数字を押さえておくのは必要だと思いますね。原因はいろいろあり、1つではないと思うので、インタビューしても「そうだろうな」と思う以外にどうしようもない気がします。

○柴山部会長 これは、いわゆる不本意入学の生徒さんたちの問題にかかわってくることです。たとえば、インタビューのやり方。不本意入学の生徒さんに「誰がインタビューに応じてくれないか」なんていうふうに頼んでしまうと、不本意だけれどもせっかく入学してきて、頑張っているのに、昔の傷をほじくり返されるみたいな。インタビューする側が、生徒さんの心理的なところですごくダメージを与える可能性があって、かなり慎重にやらないといけない調査になってきますね。そういたしますと、羽田委員がおっしゃっているように、限られた範囲ですけれども中退率の数値で見るとか。

○羽田委員 ポイントは入学時点。入った時点では別学校だったのに、途中で共学になった。きつく言えば、契約違反。想定外が起きたと。それが、実際にどのくらい影響を与えたのかというところで数値を見るのは、私は必要なことだと思います。

個別のケースはと聞くと、どんな改革をしても、何をしても、ネガティブな面というのは絶えず出る。そのネガティブなところばかりを追いかけていくと、政策なり制度の全体像を見失っていくことになる。

数値の状況だけで、ある程度全体の問題というのは把握できるのではないかと。起きたことの弊害ばかりいくと、何のために現場の教師はいろんなことをしているのかが逆に見えなくなりますよね。だから、さっき言った実際の移動という点までの問題がどの程度あるのかということさえ分かれば、それで十分ではないかと思いますがね。

○白幡委員 より良くするための課題をつかむわけですから。

○羽田委員　そうです。

○白幡委員　佐々木委員の言ったPTAという話ですけれども、一番大事にしたいのは、実際にそこで学んでいる生徒たちだと思う。だから、僕は生徒でいいと思うんです。それと、教えている先生方。先生と生徒のところは重要視しなければいけないのではないかなという気がするんですよ。

○柴山部会長　佐々木委員のおっしゃっていることも、すごく大切です。項目の文面は考えないといけないと思いますが、現在進行中の学校の生徒に質問紙の形で、「突然制度が変わって、どのくらい戸惑ったか」というような質問項目を入れておくというのも、やり方としてはあるかなと思いますね。

○事務局　インタビューの中で、そういったものを入れておくという意味ですか。

○柴山部会長　もし、生徒に質問紙調査を行うとしたらということです。当然、匿名という形にします。いま申し上げたのは、あくまでも提案でございます。すべきかどうかということまでは、今の段階ではきちんと考えていないんですけれども。

○羽田委員　学生調査の場合には、調査のやり方が特に問題です。内容によっては、結果を客観的に見るというよりは、新しい問題をつくる場所がある。

われわれが入学生調査をやるときに、現場の先生から批判されるのは、不本意入学かどうかを確かめるための調査票に「第何希望ですか」と。どうしても志望順位を入れたいくなるんですよ。学部の先生からも「第何希望でも、せっかく入って喜んでいて、これから勉強しようとしている学生の意欲をそぐだけだ」と批判を受けるんです。

だから、生徒に対して調査する項目の中にあるものを入れると、逆にその結果でさっき先生がおっしゃったように、「納得しながら、だんだんに頑張ってきた」というところに対して、別な要素を発生させる。これは絶対やるべきではないとは思わないんですけれども、もう少し様子を見ながら。生徒へのインタビューなんかを見ながら、判断していったらいいのではないかと思います。

○柴山部会長　齋藤委員、何か。

○齋藤委員　子どもたちにあまり迷惑をかけない形で検証をしていきたいと思います。それから、生徒たちは3年間のうちにどんどん成長していきますし、どんどん変化していきます。その変化し、成長していく子どもたちに、遅れてわれわれが質問していくというのは、先ほどからお話しになっているように、子どもたちに迷惑をかけてしまいがちなところもあろうかと思えます。もし質問するのであれば、そこは十分に配慮してほしいと思います。昨日までの子どもたちと、次の日の子どもたちとは、目まぐるしく気持ちは変わっていつている。そこを前に引き戻すということだけは、したくないなという気がします。

○羽田委員 学生の場合には、大勢にインタビューする。数が少ないと答えてくれない。高校生の場合は、たくさんいると逆に言いにくいかもしれませんね。その辺、どれくらいの規模でやるのかというのは、技術的に非常に大事なところ。現場のほうでいろいろと考えていただいて、設計しないとイケないですね。

○高橋次長 そうですね。学校に行って直接聞き取り調査をするやり方は、学校の先生方とも相談します。何人ぐらいが一番気楽にしゃべれるのか。学年を全部ひっくるめて一緒にやったほうがいいのかもしいし、学年別に小さいグループで話を聞いたほうがいいのかもしいかもしれません。そこは直接学校とやり取りしながら、固めたいと思います。

○羽田委員 場合によっては、そのグループの大きさに合わせて委員がたくさんいなければいけないということもありますので、さらに詳細を詰めていただいたほうがいいのかと思います。

○倉光委員 男子校スタートの男女共学と、女子校スタートの男女共学と。これはバランスしていくんでしょうか。

○事務局 そこは考えないとだめですね。

○倉光委員 そうですね。質問なんかも変わるんですよね。

○羽田委員 質問項目は早急につくっていただきたいですよ。

○柴山部会長 インタビューなんですけれども、ある種、構造化して。どのファクターが違うかということと比較しながら結論を出そうとしていますから、その質問項目はなるべく共通にしたほうがいいのかと思います。

あと、インタビューの技量。たぶん、われわれメンバーで手分けして行かないといけなくなると思うんです。そのときに、われわれがものすごく怖い顔をして、生徒さんたちが圧力を感じるような中では、なかなかいいお話は聞けない。その辺りもどうするか。一番、頭が痛いところですよ。ざっくばらんなところを聞きたいんだけど、表面的なことしか言ってもらえないとか。

○白幡委員 われわれ素人が考えてもなかなか難しい。構造化されれば、関連性のある質問をして、後できちんと分析できるようになっている。われわれも社員の意識調査というのを何年かに1回ずつやっています。出てきたデータは専門会社が分析してくれるんです。学校の方でも、そういう研究をしている人がいるんですよ。

○羽田委員 ただ、私なんかが見ていると、きちんと話を聞いていれば分かることではないかと思うので、そんなにお金をかけなくても。われわれが何を聞けるかということよりも、まず場

の設定。生徒がきちんと言ってくれるように、アイスブレイクをする。基本的なコミュニケーションの関係をつくった上で聞いて、きちんとメモを取っていく。要するに、まずは生徒が本音で話す環境をつくってあげれば、いいのではないかと思います。そのためには、時間が問題。おそらく1時間くらいかかる。昼休みの時間だけで足りるのかなど。現実には、むしろそういうところの方が心配ですよ。

文科省の関係で大学調査をした時には私も学生のインタビューに入ったんですが、7、8人いて、1時間です。1人2分くらいしゃべらせて、3往復して6分。10人いれば、それで60分です。ポイントを絞って何を聞きたいかをはっきりと伝えて、ポイントで言ってもら。だから、いきなり当てるのではなくて、言語化してきちんと言える子でないとまずいです。また、少し代表性を持たせて「友達はどう」というのも必要ですよ。まじめな勉強グループだけの代表でいくと、こっちの方は全然押しえられていないというような問題もあります。

それから、グループワークをさせるという方法もあります。20人集めて5つのグループをつくって、「5分でまとめて何かを言え」とか。その場では無理だから、そういうことを言えそうなやつに、事前に「周りの子どもたちと相談して、考えてこい」とやるとか。一番やりやすいのは、仲の良いクラスを1つサンプリングして、そこでグループワークをさせる。「質問に対してどう思うか、1分で相談してよ」とかね。慣れている子どもたちだと、それでやれる。専門家の方向よりは、むしろそういうやり方のほうが素直な意見が出てくる気はする。大人のインタビューのようにいきなり行って話をするというよりは、事前の仕掛けをつくったほうがいい感じがします。

○柴山部会長 その辺りは高校の先生たちと相談しながら。

○羽田委員 うまくホームルームを運営している先生のクラスにパッと行くのが、一つはいい方法かもしれませんよね。

○倉光委員 全体の意見を集約するという中では、生徒会とか。そういう意見もいいと思うんです。

○羽田委員 そうですね。事前に生徒会に意見を集約させるというのもありますよね。

○倉光委員 なかなか大変なんですね。誰を選んで、どういうふうにしていくかというのは。その点、生徒会というのは、そういう役回りを担っている部分もあります。それに生徒会でしたらどの学校にもありますので。

○羽田委員 それはそうですね。生徒会の代議委員会のところだけでも、事前に少し話し合いをさせておく。「そこではこんな意見が出ました」というのを発表してもらだけでも、かなり状況は把握できるかもしれない。

○柴山部会長 具体的なことになると、まだいろいろ決めなければいけないところが出てきそう

ですが、ヒアリングでデータ分析を補足しないといけないということです。生徒さんたちにあまり迷惑にならないような形で、かつ本音のところを聞き出す。ある意味、非常に難しいところですが、その辺りのことをやっていきたいと思います。それでいまのお話を整理させていただいて、具体的なところを決めていきたいというふうに考えています。

男女共学化の検証につきましては、来年度、本格的に実施する予定でありますので、当面はそのような形で。来年度の本格実施に向けての予備調査という意味合いも含めて、この作業を進めさせていただければよろしいかと思いますが、いかがでしょうか。

(「はい」という声あり)

○柴山部会長 ありがとうございます。以上で、議事(2)までは審議が終了いたしました。以降は非公開で審議を行います。申し訳ございませんが、傍聴の方は御退席をお願いしたいと思います。

5 議事(3) 高校教育改革の現状把握について

*以下は、非公開により審議を行いました。

*学科別のアウトカム(期待した成果)を確認した上で、学校別の各種のデータを見ながら、学科別の特徴を検討しました。

6 閉 会